南紀熊野地域における観光行動に関する考察*
―南紀熊野体験博における観光周遊行動と観光地選択との関連性―
A Study on Sightseeing Travel Behavior in Nanki-Kumano Region*

伊藤　雅**・中原清志***
By Tadashi ITO**・Kiyoshi NAKAHARA***

１．はじめに

和歌山県南部の南紀熊野地域は，田辺市（人口約7万人），新宮市（人口約3.5万人）の２市とその他14町村を含む人口約20万人，面積約2000km^{2}の地域である．この地域は，古来より信仰の厚い熊野三山と白浜，勝浦といった温泉を中心として年間延べ約1000万人の観光客を集めている地域である．

主要な陸上交通機関は，海岸沿いを走る一般国道42号線とJR紀勢本線，山間部を横断する一般国道311号線があるだけであり，観光ピーク時の交通混雑や災害時の迂回路確保の困難などの問題を抱えている．また，この地域は半島の南端に位置するため，大阪・名古屋などの大都市との時間距離が長いこと，主要な産業の立地に乏しいことなどから，過疎と高齢化の問題もあり，観光により地域振興を図っていくことが重要となっている．

このような背景のもとに，これまであまり調査・研究がなされてこなかった南紀熊野地域を対象として，1999年4月から9月にかけて開催された「南紀熊野体験博」の機会を捉えて，観光交通行動の実態を調査した．これにより，従来の観光入込客数調査，旅客流動調査，道路交通センサスなどの断片的な観光・交通実態ではなく，観光行動のODと交通手段や周遊行動といった連続性を見出す情報を得た．また，アンケート対象者への追跡調査を実施し，博覧会後１年間の主な観光行動について調査することにより，博覧会実施によるリピート効果に関する検討も行った．

本稿では，(1)南紀熊野地域の観光客の主要特性（出発地，個人属性，利用交通手段），(2)南紀熊野地域内での観光周遊行動パターン，(3)観光地の魅力と訪問客層，(4)追跡調査に基づく観光地選択要因，についてまとめた結果を示し，南紀熊野地域の観光行動の様相を明らかにする．

２．調査の概要[1)]

アンケート調査の内容はパーソントリップ調査の要領により，その１回の観光（南紀熊野体験博を含む観光）での立ち寄った場所と滞在時間，出発から到着までの所要時間を記入してもらうというものである．そして，観光客の属性として，現住所，同行者属性，来訪者属性，途中経路の情報としての渋滞状況，公共交通の利便性，観光地の魅力に関連することとして目的地の感想，全体の感想と言った内容を盛り込んだ．

調査は1999年5月および7月～8月の期間に那智勝浦・田辺の両シンボルパーク専用駐車場と最寄りのバス停で合計8,545票のアンケート票を配布し，後日添え付けの封筒にいれて返送してもらうという方法をとった．回収した有効アンケート数は486票，有効回収率5.7%であった．アンケートの回収結果を表１に示す．

表１　アンケート票回収結果

配布場所	勝浦	田辺	計
配布数（票）	1589	6956	8545
回収数（票）	220	378	598
有効回答数※（票）	185	298	483
有効回答率（%）	11.6	4.3	5.7

※有効回答はトリップ分析が可能なものを指す

*キーワーズ：観光・余暇，地域計画，調査論
**正員，博(都市・地域計画)，和歌山工業高等専門学校環境都市工学科（和歌山県御坊市名田町野島77，E-mail: tito@wakayama-nct.ac.jp）
***正員，工修，和歌山工業高等専門学校環境都市工学科名誉教授

３．南紀熊野地域の観光客の特性

本研究のアンケート調査は，南紀熊野体験博のシンボルパークへの来場者を対象としたものであるが，この博覧会は南紀熊野地域全体を博覧会の会場と見立てたものである．従って，シンボルパーク来場者は，南紀熊野地域を周遊する観光客とみなしていく．

来訪者の出発地を見ると（図１），和歌山県内が約40%，また隣県の大阪府・奈良県・三重県が約37%で，全体の約80%が県内と隣県からの来訪者となっている．

次に，出発地別に来訪者の交通手段（出発地から最初の訪問地までの手段）を見ると（図２），県南部の紀南出発においては,約95%が自家用車による来訪となっているのに対して，県北部の紀北出発で約90%，県外出発では自家用車の利用は約50%とさらに低くなっている．自家用車で移動した場合，移動の自由さが利点であるが，紀南のように軸となる道路が国道42号線だけとなると渋滞を回避することが難しい．また，県外からの来訪になると渋滞があればそれだけ観光の時間が減ることになり，公共交通の利用比率が高くなっているものと見られる．

アンケートを回答していただいたグループの代表の年齢構成は（図３），30代，40代が半数以上を占め，50代以上の中高年が３割を占めており，この地域の訪問層としては若者の比率が少なく，家族連れや中高年層が主だった年齢層となっている．

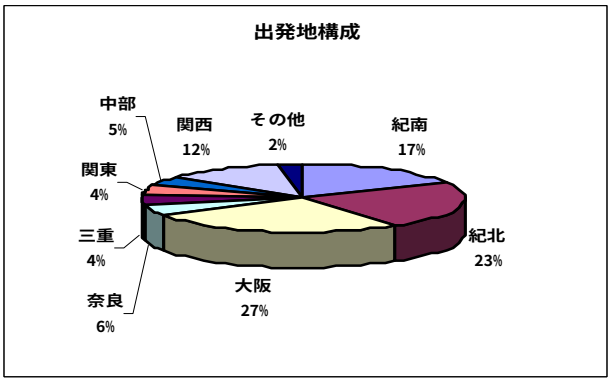


図１　来訪者の出発地の構成比

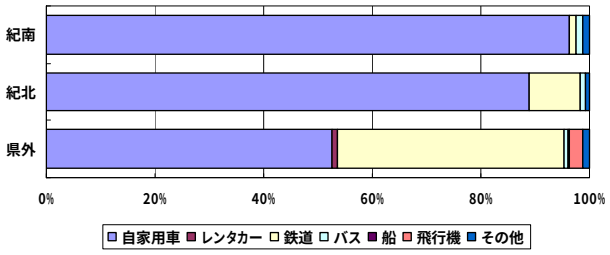


図２　来訪者の利用交通手段

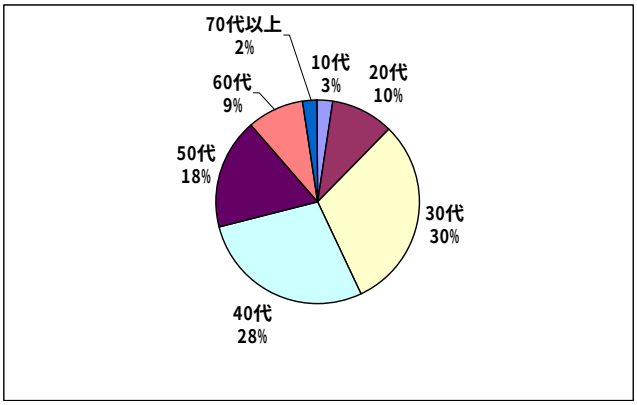


図３　アンケート回答者の年齢構成

４．南紀熊野地域の観光周遊パターン

南紀熊野地域における観光周遊パターンを把握するに当たって，南紀熊野地域を表２の区分に従ってゾーン分けを行った．そして，出発地及び旅行の宿泊／日帰りの別によりその周遊パターンを見出した．

地元南紀熊野地域の観光客は日帰りでシンボルパークへ遊びに来るパターンが多く，１地区のみを周遊するパターンが大半を占めている．一方，宿泊

表２　地区ゾーン

地区名	市町村名
紀南西部	田辺市，白浜町，上富田町，日置川町
紀南南部	すさみ町，串本町，古座町，古座川町
紀南東部	新宮市，那智勝浦町，太地町
紀南北部	中辺路町，本宮町，大塔村，熊野川町，北山村

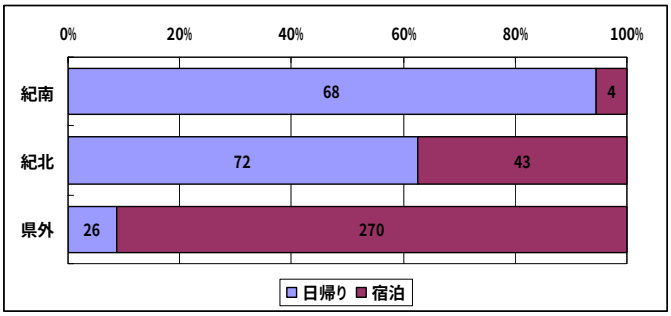


図４　出発地による宿泊／日帰り旅行の割合

を伴った場合には，１地区のみの周遊は３割程度にとどまり，南紀熊野地域の東西を周遊したり，地域全体を周遊するようになっており，宿泊の場合には大幅に行動範囲が広がっていることがわかる．

また，訪問箇所数の違いは，日帰りと宿泊で３倍近い格差があるほか，利用交通手段によっても大きな特徴が現れている．自動車による訪問箇所数の平均は4.0，鉄道による平均訪問箇所数は3.4であるが，図５に示すように，鉄道では３～４箇所が訪問箇所数のピークであるのに対して，自動車は自由自在に訪問が可能な状況となっている．

自動車は近隣からの日帰り旅行の主な交通手段となっているが，今後の高速道路の延伸により県外からの日帰り旅行の増加も考えられ，これに対応した観光地計画も必要となってこよう．

５．観光地の魅力と訪問客の特徴

南紀熊野体験博が開催された1999年度の主な観光地の入込客数をみると[2)]，従来より白浜地区と勝浦地区の温泉地が多くの観光客を集め，宿泊客の割合も高くなっている（図６）．また，田辺地区（中辺路を含む）では，体験博の開催と熊野古道人気により，日帰り客が大幅に増加している（前年比59%増）．ここでは，このような観光客数の動向と来訪者の属性，意識との関連を考察する．

訪問地の平均滞在時間をみると，宿泊施設においてはいずれの地区でも平均が15～16時間となっており，１泊２食付きでゆっくりと滞在している．観光施設の滞在時間（図７）は地区別にばらつきがで

表３　日帰り／宿泊の別による周遊パターン

	日帰り	宿泊
平均訪問箇所数	1.8	5.2
１地区のみの周遊	141	136
紀南西部・紀南東部の双方を周遊	7	42
すべての地区を周遊	0	11
サンプル総数	166	317

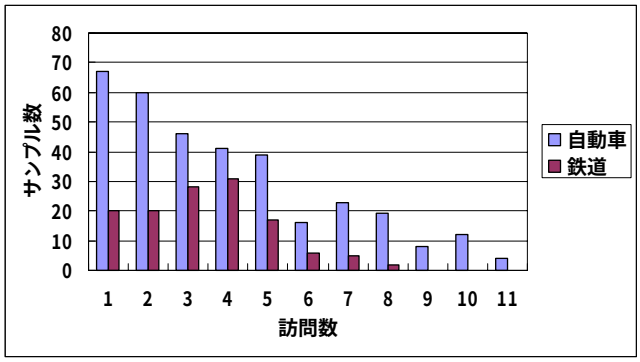


図５　自動車と鉄道による訪問箇所数の分布

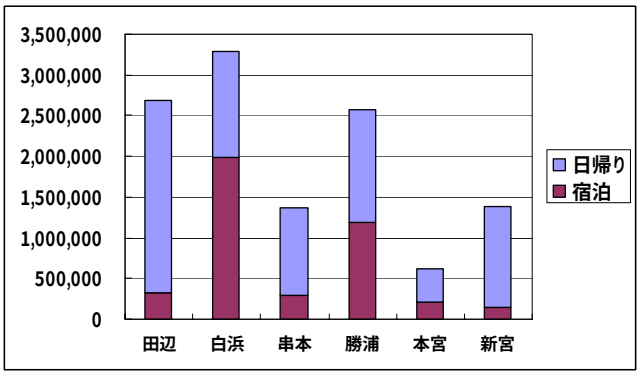


図６　地区別の年間観光客数（1999年）

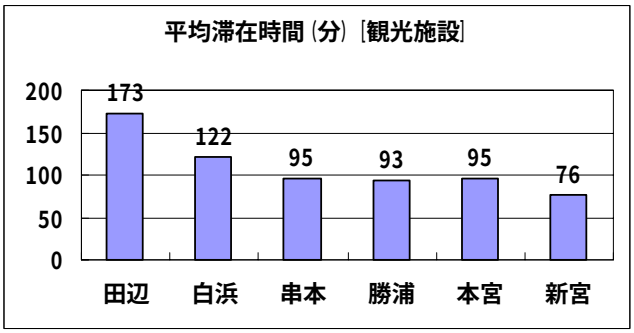
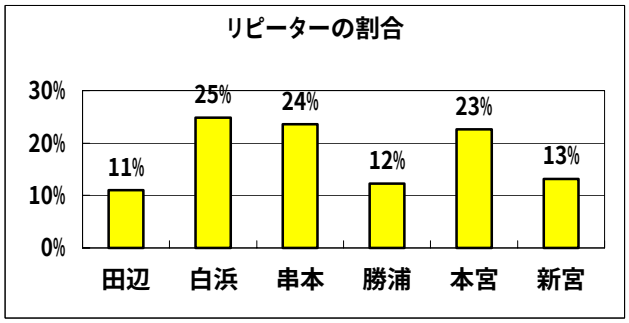


図７　観光施設の平均滞在時間



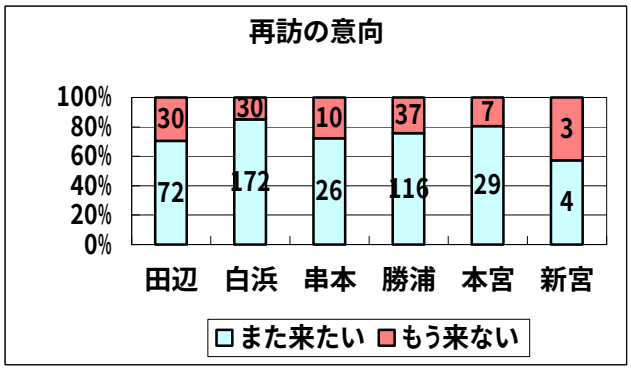


図８　リピーターの割合と再訪の意向

ており，海水浴や熊野古道の散策など自然に親しむ観光を楽しむことができるところにおいて滞在時間が長くなる傾向が見られる．

訪問客が訪れた観光地への魅力や意識に関する代理指標としてリピーターであるかどうか，再訪の意志があるかどうかを問うた結果を見ると（図８），リピーターの多い地区ほど，再訪の意向が高い傾向が見られた．

６．追跡調査に基づく観光地選択要因

南紀熊野体験博の終了後，観光客は再訪してくれたのか，またどのようにして観光地を選択しているかについて，南紀熊野体験博時の調査アンケートに答えていただいた方々に追跡調査としてその後１年間の観光の行き先を調査した．

調査は2000年10月に郵送配布・郵送回収の方法により実施し，前年度のアンケートに答えていただいた方々の中で住所がわかる人を対象とした．

アンケートでは，a) １年間の旅行先，b) その旅行の旅行期間，c) その旅行で周遊した観光施設，d) その旅行で使った交通機関，e) その旅行での同行者，f) その旅行の動機，などをうかがった．アンケート票の配布数は578票，回収数は279票，回収率は48％であった．回答のあった279人のうち169人(61%)が南紀熊野地域の博覧会後の１年の間に再訪していた．

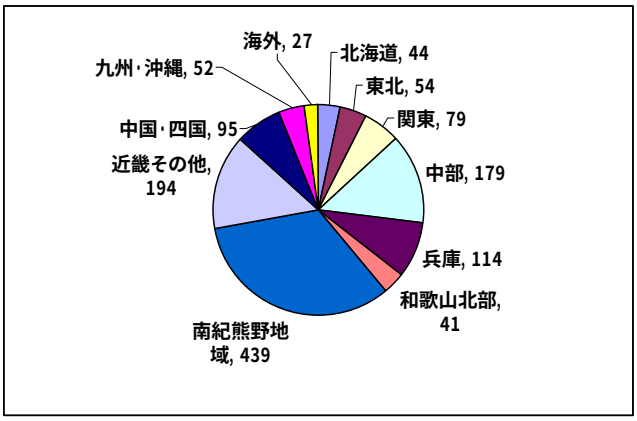
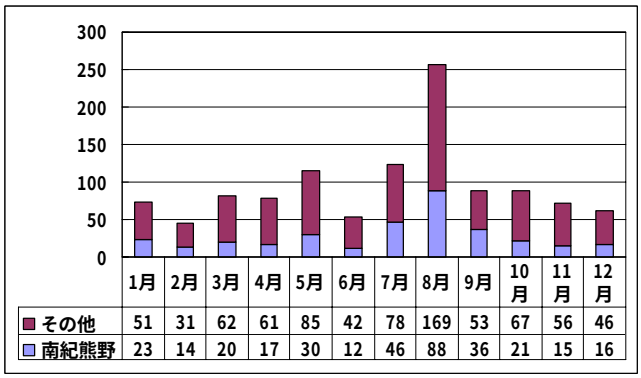


図９　博覧会後１年間の観光旅行の行先



	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
その他	51	31	62	61	85	42	78	169	53	67	56	46
南紀熊野	23	14	20	17	30	12	46	88	36	21	15	16

図10　月別旅行回数

サンプルの１年間の総旅行回数は1318回で１人平均4.7回となっている．行き先の構成をみると，回答者の３割が和歌山県居住者であることも一因ではあるが，南紀熊野地域の選択割合が高くなっている．またこの年(2000年)は，淡路花博が開催された年でもあり，兵庫県の選択割合も高くなっており，イベントの有無により観光地が選択されることの表れとなっている．

月別の旅行回数では，お盆を含む８月が最も多く，南紀熊野地域も夏期に訪問地として選択される割合が高くなっていた（図10）．

７．おわりに

南紀熊野体験博来場者への一連の観光周遊行動の調査とその後１年間の観光実態の調査により，観光地選択の特徴と南紀熊野地域での観光周遊状況の実態を明らかにした．今後この調査結果を高速道路延伸等による観光周遊行動への影響分析などに活用していく必要がある．

謝辞

本研究を遂行するに当たって，和歌山県土木部道路建設課の協力を得た．また，和歌山県より平成11･12年度「わかやま学２１」地域連携推進事業補助金を得た．そして，和歌山工業高等専門学校環境都市工学科卒業生の須山昌典・中川洋一・小笹豊明・山田大輔・池端聡・宮本慎也の諸氏には多大な協力を得た．ここに記して感謝の意を表する．

参考文献

1) 伊藤　雅・中原清志：南紀熊野体験博における観光行動に関する考察，土木学会第55回年次学術講演会，IV-133，2000.

2) 和歌山県：平成11年度観光客動態調査報告書，2001.